

一 次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

昔、切支丹<sup>キリシタン</sup>が初めて日本に渡来したころ、愛<sup>(1)</sup>という語で非常に苦労したという話がある。あちらでは愛すは好むで、人を愛す、物を愛す、みな一様に好むという平凡な語が一つあるだけだ。ところが、日本の武士道では、不義はお家の御法度で、色恋というと、すぐ不義とくる。恋愛はよこしまなものにきめられていて、清純な意味が愛の一字にふくまれておらぬのである。切支丹は愛を説く。神の愛、キリシトの愛、けれども、愛は不義にたらなるニュアンスが強い<sup>\*</sup>のだから、この訳語に困惑したので、苦心のあげくに発明したのが、大切という言葉だ。すなわち「神のご大切」「キリシトのご大切」と称し、余は汝<sup>なほ</sup>を愛す、というのを、余は汝を大切に思うと訳したのである。

実際、今日われわれの日常の慣用においても、愛とか恋は何となく板につかない言葉の一つで、僕はあなたを愛します、などという、舞台の上でウワの空にしゃべっているような、われわれの生活の地盤に密着しない空々しさが感じられる。愛す、というのは何となくキザだ。そこで、僕はあなたがすぎだ、という。この方がホンモノらしい重量があるような気がするから、要するに英語のラヴと同じ結果になるようだが、しかし、日本語のすぎだ、だけでは力不足の感があり、チヨコレートなみにしかすぎでないような物たりなさがあるから、しかたなしに、とてもすぎなんだ、と力むことになる。

日本の言葉は明治以来、外来文化に合わせて間に合わせた言葉が多いせい<sup>か</sup>、言葉の意味と、それがわれわれの日常に慣用される言葉のイノチがまちまちであったり、同義語が多様でその各々に霧<sup>も</sup>がかかっているような境界線の不明確な言葉が多い。これを称して言葉の国というべきか、われわれの文化がそこから御利益を受けているか、私は大いに疑っている。

惚<sup>ほ</sup>れたというと下品になる、愛すというといくらか上品な気がする。下品な恋、上品な恋、あるいは実際いろいろの恋があるのだから、惚れた、愛した、こう使いわけて、たった一字の動詞で簡明瞭に区別がついて、日本語は便利のようだが、しかし、私はあべこべ<sup>(2)</sup>の不安を感じる。すなわち、たった一語の使いわけによって、いともあざやかに区別をつけてくれますましてしまうだけ、物自体の深い機微、独特な個性的な諸表象を見のがしてしまう。言葉にたよりすぎ、言葉にまかせず

ぎ、物自体に即して正確な表現を考え、つまりわれわれの言葉は物自体を知るための道具だという、考え方、観察の本質的な態度をおろそかにしてしまう。要するに、日本語の多様性は霧囲氣的でありすぎ、したがって、日本人の心情訓練をも霧囲氣的にしている。われわれの多様な言葉はこれをあやつるにはきわめて自在豊饒な心情的沃野を感じさせてたのもしい限りのようだが、実はわれわれはそのおかげで、わかたようなわからぬような、万事霧囲気ですまして卒業したような気持になっているだけの、原始詩人の言論の自由に恵まれすぎて、原始さながらのコトダマ\*のさきはぶくに、文化の借り衣裳いしやうをしているようなものだ。

人は恋愛というものに、特別霧囲気を空想しすぎていようだ。しかし、恋愛は、言葉でもなければ、霧囲気でもない。ただ、すぎだ、ということの一つなのだろう。すぎだ、という心情に無数の差があるかもしれぬ。その差の中に、すぎ、と、恋との分があるのかもしれないが、差は差であつて、霧囲気ではないはずである。

恋愛というものは常に一時の幻影で、必ず亡ほろび、さめるものだ、ということを知っている大人の心は不幸なものだ。

若い人たちは同じことを知っていても、情熱の現実の生命力がそれを知らないが、大人はそうではない、情熱自体が知っている。恋は幻だということ。

年齢には年齢の花や果実があるのだから、恋は幻にすぎないという事実については、若い人は、ただ、承った、ききおく、という程度でよろしいのだと私は思う。

ほんとうのこと(3)というものは、ほんとうすぎるから、私はきらいだ。死ねば白骨になるという。死んでしまえばそれまでだという。こういうあたりまえすぎることは、無意味であるにすぎないものだ。

教訓には二つあつて、先人がそのために失敗したから後人はそれをしてはならぬ、という意味のものと、先人はそのために失敗し後人も失敗するにきまつているが、さればといつて、だからするなとはいえない性質のものと、二つである。

恋愛は後者に属するもので、所詮幻であり、永遠の恋などは嘘うその骨頂だとわかつていても、それをするな、といい得ない性

質のものである。それをしなければ人生自体がなくなるようなものなのだから。つまりは、人間は死ぬ、どうせ死ぬものなら早く死んでしまえということが成り立たないのと同じだ。

私はいったいに万葉集、古今集の恋歌などを、真情が素朴純粹に吐露されているというので、高度の文学のようにいう人々、そういう素朴な思想が嫌いである。

極端に言えば、あのような恋歌は、動物の本能の叫び、犬や猫がその愛情によつて吠え鳴くことと同断で、それが言葉によつて表現されているだけのことではないか。

恋をすれば、夜もねむれなくなる。別れたあとには死ぬほど苦しい。手紙を書かずにはいられない。その手紙がどんなにうまく書かれたにしても、猫の鳴き声と所詮は同じことなので、以上の恋愛の相は万代不易の真実であるが、真実すぎるから特にいうべき必要はないので、恋をすれば誰でもそうなる。きまりきったことだから、勝手にそうするがいいだけの話だ。

初恋だけがそうのではなく、何度目の恋でも、恋は常にそういうもので、得恋は失恋と同じこと、眠れなかつたり、死ぬほど切なく不安であつたりするものだ。そんなことは純情でもなんでもない、一、二年のうちには、また、別の人にそうなるのだから。

<sup>(4)</sup> 私たちが、恋愛について、考えたり小説を書いたりする意味は、こういう原始的な(不変な)心情のあたりまえの姿をつきとめようなどということではない。

人間の生活というものは、めいめいが建設すべきものなのである。めいめいが自分の人生を一生を建設すべきものなので、そういう努力の歴史的な足跡が、文化というものを育てあげてきた。恋愛とても同じことで、本能の世界から、文化の世界へひきだし、めいめいの手によつてこれを作ろうとするところから、問題がはじまるのである。

A君とB子が恋をした。二人は各々ねむられぬ。別れたあとでは死ぬほど苦しい。手紙を書く、泣きぬれる。そこまでは、二人の親もそのまた先祖も、孫も子孫も変わりがないから、文句はいらぬ。しかし、これほど恋しあう御兩人も、二、三年後には御多分にもれず、つかみあいの喧嘩もやるし、別の面影を胸に宿したりするのである。何かよい方法はないものかと考え

る。

しかし、大概そこまでは考えない。そしてA君とB子は結婚する。はたして、例外なく倦怠けんたいし、仇心あだしんこころも起きてくる。そこで、どうすべきかと考える。

その解答を私にだせといつても、無理だ。私は知らない。私自身が、私自身だけの解答を探しつづけているにすぎないのだから。

(坂口安吾「恋愛論」(一九四七年)より。一部省略)

注(\*)

キリシト⇨キリスト。

コトダマのさきはふ国⇨ことばに宿る靈妙な力により幸福がもたらされる国。古代より日本を美化する表現として用いられた。

問一 傍線部(1)はどうか、説明せよ。

問二 傍線部(2)の「不安」とはどのようなものか、説明せよ。

問三 傍線部(3)のように筆者が言うのはなぜか、説明せよ。

問四 傍線部(4)について、筆者はどのように考えているか、説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

もともと生物学の用語である「共生」。社会のスローガンのようにも使われているが、落とし穴はないのか。

これは、日本経済新聞二〇〇八年六月一日夕刊のインタビュー記事のリードの文章である。インタビュー相手は霊長類学者、山極寿一氏。

「人と自然の共生」「多文化共生」「民族と民族の共生」……。あちこちで共生という言葉があふれている(同紙)。

このような事実を前に、氏は、当然に生物学でいう「共生」という語の意味を基準に、この語の濫用に危惧を示す。この語のオリジナルは、氏の専門の生物学でかなり明確な内容をもつ術語であるからである。

私はこの例を持ちだすことで、ある語の意味の変質や許せない転用を難じようとしているのではない。一般に語の意味の変質は避けられない。そして、この語の場合は変質ではなく大幅に内容を変えた転用であるが、そこで、生物学で使う場合と人間社会でのある有り方を示す語として使われる場合とで、その意味内容が違うことを容易に人々はわきまえることができる。それなら、それはそれで、言葉が流通してゆくのを見守るしかないだろう。もちろん、混乱の危険もないわけではないが、大したことはあるまい。

私が問題にしたいのは、この語がスローガンのように使われ、あふ溢れているということの方である。使用頻度が高いということと、スローガンのように溢れる、というのとは違う。助詞、助動詞などは別にしても、「天気」「事故」「仕事」「帰る」「食べる」「支持率」のような、群を抜いて頻繁に口にされる語はたんとある。スローガンとは主張する言葉として繰り返されて目につくものである。そして、スローガンの中心に位置する語、ないし語群としてのフレーズは、権威をもつようになる。そして、あ

る見方へと人々を誘導し、更にはある態度や行動を高く価値づけ、他の有り方を難しようとする傾向をもつ。

ある語が権威化する出発点は、主張を伴わせての繰り返しにある。権威化によって獲得するのは、その主張がコミットする価値(ないし価値観)、これの人々の承認、それも当然性を帯びたものとしての承認である。その主張に反対する人々でも、少なくともある範囲に限定した上では承認する、このようになる。

「共生」という語の場合、これが生物学で使われるときには、ある主張を伴っているわけではない。異種の生物がうまく互いに利用し合っていることを、その生物にとつてのメリットとして確認するにしても、そのメリットは、だからそれを追求すべきだ、というふうになるたぐいの価値であるわけではない。しかるに、人が関わる事柄にこの語が転用されたときには、ある価値にコミットすることの要請、という主張が含ませられることになる。「人と自然との共生」と言われるとき、それは、ある特定の選択をなすべしといった主張を響かせている。

注意すべきは、「人と自然との共生」というフレーズは、一方で、人が自然とともにでなければ生きられないという事実(それも分かりやすい事実)の確認を促すような面をもっていて、そうしてこの事実に基づいて、だから、これこれしかじかの仕方は人は生きなければならぬ、と、ある特定の選択とそれを促すある価値(ないし価値観)の否応ない承認<sup>(2)</sup>を求める、このような構造を内包していることである。確かに事実ではあることの確認がなされるのではあるけれども、異種で共生する生物と違つて人の有り方には大きな選択の余地があるのだから、その確認は、まさにこのことを確認すべしという要請とともに、いつの間にか、(確認の要請を超えた更なる)特定の要請に容易に転化するのである。

(もちろん、確認を要請すること自体がある価値観に基づいていて、これと、確認の後で持ちだされる特定の要請を支配している価値観は連続していよう。それから、「共生」という言葉の場合、「共」という語が、「共同体」「共存」「共栄」「共に歩もう、助け合おう」などの語と共鳴し、プラスのイメージをもつことによつて、この語に当然にある価値を含ませる傾向がある。このような仕組みも作用して、この言葉の権威化が進む。)

ただ、事実の確認とみえる部分から特定の要請までには飛躍がある。だから、要請の実質は曖昧になる可能性は大きい。

「人と自然との共生」を踏まえた生き方を私たちはしなければならぬ、それは間違いない、分かった、それで具体的にはどうすればよい？ イメージだけが残る、イメージに従った実際への移行ではさまざまな可能性が模索されるべきものとしてあると、こういった按配あんばいである。<sup>(3)</sup>ここに、語の空洞化がある。

(松永澄夫『感情と意味世界』より。一部省略)

問一 傍線部(1)はどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

次の文は、中世の念仏行者たちが折々に弟子に語った言葉を集録した『一言芳談』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

昔の人は、世を捨つるにつけて、清く素直なるふるまひをこそしたれ。このごろは遁世をあしく心得て、かへりてけぎたなきものになりあひたるなり。

\*<sup>こせもの</sup>後世者といふ者は、木をこり水をくめども、後世を思ふ者の木こり水をくむにてあるべきなり。

それがしは、<sup>(1)</sup>事ふせうにふれて世間の不定ふていように、この身のあだなる事をのみ思ふあひだ、をりふしにつけて、起居きこのふるまひまで

に、あやふき事おほくおぼゆるに、御房ごぼうたちは、よにあぶなかりぬべきをりふしにも、いささかも思ひよせたる気色もなきなり。まして、うちふるまひたるありさまなど、よに思ふ事もなげにみゆるなり。されば、<sup>(2)</sup>ただ無常むじようのことわりも、いかに言はむにはよるべからず。いささかなりとも心にのせてのうへの事なり。

後世者は、<sup>(3)</sup>いつも旅りょに出でたる思ひに住するなり。雲のはて、海のはてに行くとも、この身のあらむかぎりは、かたのごとくの衣食住所なくてはかなふべからざれども、執すると執せざるとのことのほかにかはりたるなり。常に一夜のやどりにして、始終のすみかにあらずと存ずるには、さはりなく念仏の申さるるなり。

(『一言芳談』より)

注(\*)

後世者＝極楽往生を願う者。

御房たち＝「御房」は僧侶の敬称。ここでは聞き手の弟子たちを指す。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問題は、このページで終わりである。